

## Ｊトレンドの調査手段としてのエスノグラフィー（Week 4 & 5）

### 考察のポイント：

- 1) 「エスノグラフィー」って何？
- 2) フィールドワークの進め方
- 3) 倫理的な心得

---

### 1. 文化学の産物としてのエスノグラフィー：

「エスノグラフィー (ethnography)」とはある民族（あるいは民俗）の生き方（*ethno* = an ethnic way of life）を記述する（*graphy* = describe）という意味で「民族誌」（または「民俗誌」と訳すことができます。具体的には文化をテーマとする研究者が研究を通して産み出す論文や論考のことを指しますが、記述していくプロセスや研究の方法論、そして反省的学習をも含めたより広い意味で「異文化に関する研究作業」を示す場合もあります。エスノグラフィーの完成させるために文化研究者はフィールドワークを実施します。

### 2. フィールドワークの取り組み方：

「フィールドワーク (fieldwork)」とは、文字通りある「場所 (field)」に出て行って、そこで「研究作業 (work)」を行うことを意味します。「現地調査」と訳すことができるでしょう。異文化・自文化に関わらず、「文化現象」を研究対象として扱う文化学においてフィールドワークは欠かすことの出来ない情報 (= データ) 収集の手段です。「エスノグラフィーの父」といわれた人類学者の B・マリノフスキー (1884-1942、ポーランド生まれの人類学者、本格的フィールドワークによる『西太平洋の遠洋航海者』は民族誌の古典として著名、機能主義の提唱者) は、フィールドワークに取り組むにあたって、次の2点を強調しています：

- 1) フィールドワークとは、異文化をその内側から理解するための手段である。
  - 2) フィールドワークは参与観察を軸として展開される異文化理解の方法である。
- この2つの点は相互に関連しているものですが、異文化に関する現地調査をベースに研究者がその文化の中に立って様々な事柄を理解・記述していくことの重要性を指摘しています。これは今でこそ当たり前になりましたが、1920年代当時、権威ぶったスタンスで異文化を傍観し、あるいはちょっと異文化を訪れただけで、その文化に対する勝手気儘な解釈をもっともらしく語っていた多くの文化研究家たちへの痛烈な批判となり、その後「文化人類学」と分野を体系化し、学術的に位置づける方法論となったのです。

マリノフスキーの提示したフィールドワークの手法に基づくエスノグラフィ方法論の体系化以降、「文化を理解する」という作業がその文化の中に入って人々の生き方や行動の仕方に関する長期観察を実施し、これまで知られていなかった部分に注意深く光を当てていくという学術的なアプローチとなり、「椅子に座ったまま書かれる民族誌 (armchair ethnography)」と一線を画するものになったというわけです。

より具体的には、エスノグラフィには観察、対話、そして参与観察の3つの手法が含まれます。観察は研究者の研究意欲と行動力に任せて主観的に現地の様々な事情を調べるものです。これには偏見を伴いがちであるという限界が付きまといまいます。これを調整する意味で、現地の人々と対話しながら、その人たちの持つ見解を収集していく効果的な手法です。しかしこれにも、「現地の人であるが故に意識していない事柄」があるという点と、「現地にも各種の考え方や意見、思惑が交差している中で、どの人から得た情報をその文化を代表するデータとすべきか」という点で問題が生じます。含まれます。そこでこれを更に調整する手法として、現地の人たちの生き方に直接係わり、営みを自ら体験しながら問題となる価値観を調べていくという参与観察の作業が必要となります。しかしこれにも、一体どこまで参与し、どんなイベントに参与すべきなのかという反省点が常につきまといまいます。しかし一見どれを取っても中途半端に見えるこれらの手法も、出来る限り長期に渡って交互に繰り返して実践していくことで、その文化に関するより総括的で詳細なデータが収集できます。これが、長期観察の手段としてのエスノグラフィック・フィールドワークの醍醐味です。

### 3. フィールドワークの倫理的側面：

エスノグラフィック・フィールドワークには倫理的な配慮が必要条件として伴います。自分の嗜好に任せて異文化に関する情報を勝手気儘に操作し、その文化についていい放題語るという行為は、それがどんなに学術的に重要であったとしても非道徳的で違法な行為です。今では「知的財産」という言葉が用いられますが、研究調査の対象地で研究者が収集するデータ(つまり分析を通して研究者自身が編み出す論理的な主張の元となる「生の情報」)は、それを提供した人たちの所有物として責任を持って管理していく義務が研究者にはあるのです。これには個人情報から、その文化特有の観点まで様々なレベルのものが含まれますが、「何をどう語るべきか」という問題をよく考えながら、現地の人たちに後々に至るまで迷惑をかけないように極力努力・工夫をしながら調査や分析、または記述を進めていく必要があるのです。

こうした情報管理の具体的な対策として、研究者は次のような手段を取ります：

- 1) 調査対象者(インフォーマント)への調査趣旨・調査目的の説明(インフォーマントの理解と同意を得る)
- 2) インフォーマントとの公開情報の確認(オフレコ・オンレコ情報をどう扱うかに関して意見を仰ぐ)

### 3) 個人情報の保護 (仮名や婉曲的表現の使用など)

(詳しくは <http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/cs/cu/000523tar3.html#フィールドワークを参照せよ>)

---

#### マリノフスキーと『西太平洋の遠洋航海者』に観るエスノグラフィー方法論

by 大木竜児、吉良敦岐、守尾慎一

(出典: [http://www.ksc.kwansei.ac.jp/~z95024w/semi/kamata\\_s/kougi/97lecture/70626.htm](http://www.ksc.kwansei.ac.jp/~z95024w/semi/kamata_s/kougi/97lecture/70626.htm))

#### 発表用レジュメ

##### マリノフスキー

1) マリノフスキーは、民族学の調査をどのような方法によって行わなければならないと  
しているか。

この問題で最も参照しなければならないのは以下の部分であろう。

「1、部族の組織とその文化の解剖学は、明瞭で確実な枠組みの中で記録されなければならない。具体的な統計的資料の作成が、このような枠組みを作る方法である。2、この枠組みの中に、実生活の不可量部分と行動の類型が盛られなければならない。それらは、詳細な観察によって集められ、原住民の生活との密接な接触によって作られる一種の民族誌日誌という  
ようなかたちで記録される。

3、民族誌学的な供述、特色ある物語、典型的な発言、伝承や呪文などは口碑文として、つ  
まり原住民の考え方の記録として発表されなければならない。(P93 上)」

私はマリノフスキーの研究を以下の等式で現せられると思っている。

*マリノフスキーの研究 = 理論 + フィールドワーク + 観察者の個人差*

まず理論だが、この部分は「いかなる学術的研究でも先入観は有害になるが、過去において検討を経た問題は、科学的にものを考える人の基本的な財産であって、これらの問題は、理論的研究を行うことによってはじめて観察者に明らかとなるのである(P76 下)」、「ある珍しい現象を記録するものが、同じ学問の研究者達に考えてもらうために自分の報告を譲り渡すことは、特権であるといっても良からう。だが、それは特権であると共に義務でもあるのだ(P331 下)」というところを参照してみる。ここでは科学の本質は「伝達されるもの」という点が強調されているが、これはデュルケム以来の社会学の影響であろうか？。そして、フィールド

ワークの強調は、上の記述の2番に注目してみる。ここで使われている実生活の不可量部分とは「資料を調べたり算定したりするのでは記録できない一連の現象(P87 上)」であり、行動の類型とは「ある行事に見られる行動の仕方と形式(P89 上)」で、これはフィールドワークによって明らかになるとマリノフスキーは述べている。

また、マリノフスキーは「観察者の個人差」というところも考慮に入れて科学を考えている点が特色であろう。仮説検証型の学問は、まず仮説(理論)を作りだし、フィールドワークで確認するというものである(もちろんその仮説がフィールドワークに裏打ちされている場合もあるが)。しかし、仮説検証型の学問では完全性・客観性を過度に求めるがあまり「観察者の個人差」という点が見過ごされているのではないだろうか？マリノフスキーの方法では「観察者の個人差はあるが、事実をいって語らしめるように努めるべきである(P89 上参照)」ということになる。あくまで客観的になろうと「努める」のである。

## 2)マリノフスキーは、本文の中で現代経済学の問題点を指摘している。その部分を抜き出せ。

まずは原始的経済人という概念から押さえる。「それは現代の経済学の教科書に書いてある原始的経済人という考え方である。…この幻想的な原始人ないし野蛮人は、あらゆる行為を私利私欲を求める合理的な考え方にうながされて行き、目的を直接に、かつ最小の努力で達成する。(P129 上)」

ところが、マリノフスキーはトロブリヤンド人は労働によって得られた収穫のほとんど全部が、努力した彼自身ではなく、親類のものになってしまうところに着目する。また、クラで取引されるヴァイグアが実際には役に立たないものだということも注目すべきであろう。これを見ても分かるよう、経済学的前提である「合理的個人」の概念は、その根底から崩れさる。しかし、崩れるといっても「貨幣と効用」の関係ですべての人間を表すことができるという側面においてである。

マリノフスキーは、労働した個人は結局のところ他人から「賞賛」を得ることができるため、その点では功利的だといえるため、「人間は完全に功利的ではない」とまでは言い切らない。また、P131の脚注を見ても分かるが、マリノフスキーはすべての経済学的視点に対して「無意味だ」といってはいない。経済学的視点は一つのアプローチとして持つべきであり、ただ「問題を簡単にするために、経済学的視点だけに論点を集約することが間違いなのだ」といっているのである。ただ、それでもなおマリノフスキーの発言、つまり「人間は必ずしも合理的ではない」は力をもつ発言であろう。

ここでは、「人間は完全に功利的な動物か」という問題が残るが、この辺は J.S.ミル・ベンサムを読んだ後で検討する必要がある(といって逃げときましょう)。

### 3) クラ貿易が行われる地域の人々にとっての「労働」とはどのようなものか？そしてそのような現地民の性行を西洋人がどのように捉えているか？

「彼らは部族の慣習によって、定められた義務の為にいやおうなしに労働するか、あるいは、慣習と伝統に支配される野心や価値の為に進んで労働するかのいずれかである(P198 上)」という点を参照してみよう。これを見ても分かるように利得という概念が、原住民の労働意欲になることはなさそうである。しかし、白人がこの利得という概念によって原住民を動かそうとするから問題が生まれてくるのである。いくら給料を上げても原住民はその利得の為に働かないので、白人は「原住民は怠惰だ」という判断を下すのである。

しかしこの問題は、文明社会の中だけでも、問題として十分取り上げることができるであろう(もちろん未開社会と向き合うとより明確になるのだが)。ウェーバーのいう「伝統主義」がこれと酷似しているのではないだろうか。ウェーバーは、人間は利潤を追求するという「資本主義の精神」と、習慣としてきた単純に生活をする「伝統主義」で人間の欲求を捉えており、お互いが相いれないものであることを指摘している(つまり一方が強い集団では、他方が弱い)。この問題を広義で捉えようとする、「価値観はそれぞれの人間によって違い、それは伝わらない」というところまで見えてくるであろう。

### 4) 組織的労働と共同労働の違いは何か

組織的労働の定義は「組織的労働とはいくつかの社会的、経済的に相異なった要素の共同を意味する。しかし、これは大勢の人が技術的な分業もなく、社会的な機能の分化もなく、ただ並んで同じ仕事をするのとは全然違うのである(P200 下)」である。共同作業の具体的な例は、多数の人がいっしょにカヌーを紐で縛ったり、詰め物をしたりする作業である。つまり、共同作業とは一つの目的のために、多数の人間がグループを作り、協力することであろう。共同労働は、組織的労働よりも刺激的でおもしろく、競争心が起きるため仕事の質も良くなり、作業の進行をかなり促進するのである。これは広い範囲に渡っての相互援助、奉仕の交換、仕事における連帯性を意味する。

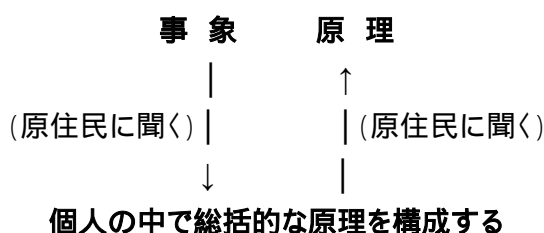
ここで注目しないといけない点は、村の酋長と村民の関係は「ブルジョアージとプロレタリアート」ではないという点である。カヌー造りで行われるカプトゥという共同労働の形式では働かせる人(酋長など)は、手伝ってくれるすべての人に食物を与えなければならない。「すべての人々を結合し、それぞれの作業を遂行させるものは、慣習と伝統への服従(P200 上)」なので

ある。このような酋長の権力構造は「悲しき熱帯」に記載されているナンビクワラ族にも見れることができる。

#### 5) マリノフスキーは「正確な民族学的調査困難である」と指摘しているが、それはなぜか？

民族誌学者は、原住民の行動を抽象化し説明しようとするが、「私が直接の助けなしにというのは、我々が概括的に結論を導き出すためには、原住民から聞いた間接の資料に全面的にたよらねばならないからである(P295 下)」点にまず注目すべきであろう。つまり研究は対象(客観)を分析するのである。そして「民族誌学者の仕事にもそれと同じように創造的な能力が必要とされているのである。しかしながら、自然科学の原理が経験的に得られると同じ意味において、民族誌的社会学の究極の包括も経験的に得られる。なぜなら、それらは、調査者によってはじめてはっきりと説明されたものではあるが、にも関わらず、客観的に示された人間の思考、感情、行動の生の姿だからである(P297 上)」というところを参照しても分かるように、客観的なデータと主観的な想像力によって、民族学の研究は進むのである。これを図式してみる。

#### <<マリノフスキーの研究方法モデル>>



これを見ても分かるように、未開社会と文明社会の接点は「原住民との会話」の間に生まれにくる。そして、そこでかわされる言葉が問題になってくるのである。そこで、P295 上から記載されているところを参照してみよう。原住民は自分たちの信仰を考えると、いくつかの基本的な前提条件を設けており、その前提条件を疑うことはない。民族誌学者がその前提条件のところに入りとうとしてあらゆる疑問を投げかけても、原住民はもともとそのような領域を表す言葉が存在しないのである。仮に質問の意味が原住民に伝わったとしても、既にこちらの観念が相手の考え方の中に流れ込んでいるため、原住民の見解は既に歪曲している。と、このような問題に対してもマリノフスキーはある程度自覚的といえよう。果たして、本当に未開社会を理解することは可能なのであろうか？いや、他人を理解することは可能なのであろうか？

#### 6) 原住民のクラ観によると、呪術は非常に大きな位置を占める。原住民は呪術についてどのように考えているか、まとめて書いて下さい。

この問題に関しては容易にまとめが見つかる「原住民にとって、呪術は、特別の部門を成す。それは、本質的に人間的で、自立的で独立的な行為を含む特殊な力である。この力とは、社会の伝統と、一定の遵守規定によって資格を与えられた人間が、ある行為を行いながら発する一定のことばの性質の中に潜められている。そのような言葉と行為は、それ自体この力を有しその作用は直接的で、なんら他の力の仲介をへない。その力は、霊とか悪魔とか超自然的な存在の権威から引き出されたものではない。またそれは自然から苦勞して引き出されたものとも考えられない。言葉と儀礼の力は根本的且つ普遍の力であるという信仰が、彼らの呪術の信仰の基礎となっている信条である(P330 上)」ここから分かることは、呪術は人間の力を越えたものでありながら、なおかつ人間と切り放された存在から生まれてくるものではないという考え方である。つまり、呪術は「超日常的な神話の世界」と「正常な世界」との間の架け橋をするものである。

西欧社会では、このような考え方は生まれてくるであろうか？西欧社会の場合、「超自然的な世界」と「日常的な社会」をつなぐものは信仰であったが、その信仰とはただ信じることによって(つまり絶対他律)のみ、神とつながることができるのである。しかし、このクラ貿易が行われている地域では、「超自然的な世界」と「日常的な社会」との間を結ぶものは呪術であり、呪術はある目的があって、個人が唱えるものである(つまり自律的)。つまり、西欧社会では人間という存在は「超自然的な社会が個人に働きかけて目的を達成」するのであり、未開社会では「超自然的な社会に個人が働きかけて目的を達成する」のである。

## 7)クラ貿易とは何故行われるものなのであろうか？そこに見いだされる価値観とは？

クラ貿易が行われる点をマリノフスキーは以下のように要約している。「クラのもう一つの特異な特徴は、その本質そのものを成している取引自体の性格である。半ば商業的、なかば儀礼的な交換であるクラは、ものを所有したいという深い欲望を満たそうとして、それ自体を目的として行われるのである。しかし…特殊な型の所有であって…所有の状態は恒久性の点では完全ではないが、その代わりに、次々と所有する人間の数の点ではたいしたもので、累積的所有とでもいったら良からう(P332 上)」また、流通するヴァイグアは、自分に威厳を付けくれるもの、自分の存在を高めてくれるものであり、ヴァイグアを所有することはそれ自体が最高の安息なのである。

つまりクラ貿易では以下の二点が重要なポイントである。

- 1) ヴァイグアの価値は、流通自体と流通の性格にある
- 2) ヴァイグアの価値は、所有することによる安息である

もしあなたが、これを二項対立とみるなら、「流通と所有が相異なるものだ」という視点に立っているからであろう。しかし、この問題を取り扱うときは「流通」「所有」とは何を意味するのかというところまでと、問題を深化させなければならない。

私たちは所有というと個人的所有を考える。しかし、ここでクラ貿易が行われる地域でヴァイグアを所有している、つまり全体でヴァイグアを所有しているという概念を原住民が持っているでしょう。だが、「彼らは社会構造の全体的輪郭について、知識を持っていない。自分自身の動機は知っているし、個々の行為の目的や、それに該当する規則も知っているが、これからどのように全体適性度が形作られるかという問題は、彼らの知能の範囲を超えている(P148下)」という記述を見ても、原住民にクラ貿易が行われる地域全体を見通す視点はないということが分かる。つまり全体的所有という概念は間違っているのである。

本文に記載されている原住民の所有観は以下の通りである。「すべての人類と同様、クラの原住民達も所有することを好み、従って獲得する事を願い、失うことを嫌うけれども、ギヴ・アンド・テイクに関する諸規定という社会的な掟から、彼らの生来の利欲的傾向よりはるかに強い力を発揮しているのである。…しかし、重要な点に、彼らにとって所有することは与えることだという点である。(p162 上)」

これは調べてみてもおもしろいかも知れないが、現地の言葉で「所有する」と「与える」が同じ単語である可能性もある。

「流通」という概念には二つの考え方ができると思われる。つまり、貨幣は「価値があるから流通する」という考え方と、「流通するから価値がある」という考え方である。後者の考え方をマリノフスキーは新たに提示したのではないか。つまり、一つの流通する事のできる空間(=構造)中に存在するから、貨幣は価値が存在するという考え方である。

8)もしクラ貿易が「その特定の地域だけに存在する手法」でなく、「人間による一つの行動形態の雛形」と捉えたと、クラ貿易によって我々は現代人の行動を根本から見直さなければならないといえる。あなたの身の回りに、クラ貿易は存在するのか？あなたにとってのクラ貿易はいかほどの意味があるのか？

なぜこの設問を作ったのか？

マリノフスキーは「進化の問題に関心をもつ理論の専門の研究者にとっては、クラは、富と価値、商取引と経済関係一般の起源について考える手がかりを、なにか与えてくれる(P338上)」と締めくくっている点を見ても分かるように、未開社会に見られるクラ貿易を文明社会の分析に使おうとした。本書の中では、「クラ貿易から見た文明社会の交換概念」については記載されていない。しかし、マリノフスキーが見た民族学の可能性は、未開の文化から近代文

明を見直すということである。当時のマリノフスキーにとって、それをすることは困難だったのかもしれないが、彼は「科学の本質は伝達すること」と考えていた。したがって、「西太平洋の遠洋航海者」を読んだ読者は、一人の学者としてこの問題について考えてみる必要がある。だから、拙いながらも各自の頭(もちろん自分も含めてですよ)で考えてもらうことにしたのである。

### 一つの回答例

これは7番でも記載したことであるが、個人的には貨幣がそれに値すると考えている。8番と問いかけ自体を読むと、ついつい「これはクラ貿易的交換を行っていて、これは近代経済学的交換を行っていると分断して考えがちになるが、一つの交換形態は「クラ貿易的」か「近代経済学的」かというように、一つの交換形態の範疇に収まるのではない。貨幣を例にとると、

貨幣は価値があるから交換する(近代経済学的)

貨幣は交換するから価値がある(クラ貿易的)

というように、「クラ貿易的」「近代経済学的」両方の概念が見えてくるのである。

それまでの学問は、もの(貨幣)が先に存在し、そこから敷衍していく形で関係(流通、交換)というものを捉えてきた。しかし、マリノフスキーの研究により「関係性」というもの自体を科学が捉えようとするようになったのである。これが後に構造主義とつながっていくことになったのではないか。

ただこれだけは間違わないでいただきたい。「人間は完全に構造の中に組み込まれている」というように断言をしているのではない。近代経済学的な視点もしかり、クラ貿易的は視点もしかりである。両方が影響を請け合って(もしかすると見えない第3極も)影響しあって、全体として存在しているのであろう。ここまでいって言い過ぎかも知れないが、その極が多数に増えたものが「複雑系」ではないだろうか。